

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	皆木 香渚子
論文題目	ベトナム・メコンデルタの塩水侵入地域に適応する生業体系の構築 —多方向の人的つながりが作る稲・エビシステム—		
（論文内容の要旨） メコン川が形成するベトナム・メコンデルタは、洪水と塩水侵入を最大の環境リスクとする。19世紀以降、本格的に開始されたメコンデルタの開拓の歴史は、洪水と塩水侵入を克服するための歴史でもある。本論文は、開拓がもっとも遅れた塩水侵入地域を対象に、小農がいかにして生存基盤を確保し、生業を維持・変容させてきたかを明らかにした研究である。特に、地域独自の農業システムである「稲・エビシステム（Rice Shrimp System, RSS）」に着目し、技術・社会・経済が複層的に絡み合う現代農村における小農の適応戦略を総合的な地域研究の手法を用いて分析している。 第1章では、本論文の問いと分析視角が示された。メコンデルタはコメの増産をささえてきたが、近年、小農は政府のコメ生産推進政策に従うだけでなく、塩水を活かしたRSSを主体的に選択してきた。先行研究では、小農世帯の脆弱性や経済収支が個別に論じられてきたが、自然環境と社会経済的条件を包括的に捉えることを意図して、本研究は実施された。 第2章では、主な調査地であるキエンザン省アンビーン県の開拓史と生業の変遷が検討された。南北統一後、国家は食糧増産のため水稻生産を最優先したが、1990年代以降、小農は独自のインセンティブに基づき生業を多角化させてきた。RSSとは乾季の塩水侵入という環境リスクを逆手に取り、塩水を利用したエビ養殖と雨季の稲作を組み合わせるものであった。本章では、その生業体系が小農の主体的かつ先駆的な試行錯誤から誕生するプロセスが検討された。その結果、RSSがかつての生業体系と技術的に継続していることが明らかになった。 第3章では、世帯ごとの自然環境と社会経済条件に応じた、RSSにおける小農の技術的な創意工夫が分析された。そこでは水路の塩分濃度や降水分布の微細な差異に応じ、世帯ごとの圃場の形状と機能、作業暦、飼育種、種苗サイズ、耐塩性品種の導入などがきわめて緻密に調整されていた。また、世帯ごとの社会経済的条件をあわせて検討することで、RSSは厳しい自然環境に対する受動的な適応ではなく、小農が自然環境条件と社会経済条件を最大限に活用するために創造性を発揮した、精緻な技術体系であることが示された。 第4章では、RSSを支える情報交換と流通網の実態が明らかにされた。従来の対面型のインフォーマルな情報交換が、RSSの開始やその後の試行錯誤、行政や企業からの情報収集、近隣住民との軋轢を克服する過程で機能していた。それに加えて近年は、			

Facebook等のソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）による情報収集が急速に浸透してきた。SNSで得た情報を小農は従来の対面型のインフォーマルなつながりの中で検討し、世帯ごとに異なる課題に利用していた。

第5章では、具体的なFacebookグループによる情報交換に焦点をあて、コミュニケーションの特性に関する実証的な分析がおこなわれた。その結果、RSSに関する技術的な「解説」や「相談」といった、従来ならば一方向であった情報の流れは、SNS上では不特定多数の参加者によって多方向に検討されていた。地域社会の対面型の情報交換では困難であった情報の共有が新たに可能となっていた。

第6章では全体の議論を総括し、メコンデルタの塩水侵入地域における、小農の適応戦略が論じられた。アンビーン県の生業変遷は、国家と小農のインセンティブがせめぎ合い、厳しい自然環境をチャンスに変えようとした動的な適応過程であった。技術的には、RSSは地域社会の中で培われてきたインフラ整備や技術体系に基づいており、自然環境の利用や社会経済的な変動への対応においても、持続可能なシステムであった。また、情報化の急速な変化にも対応し、従来のような閉鎖的な人間関係を補完・拡張し、個人が主体的に情報を取捨選択できる、情報交換の新たな仕組みも形成された。

このように本論文は、技術に着目することで、メコンデルタの人と自然の関係における小農の主体的な役割を明らかにし、人と自然の持続的な相互作用を実現するための知見を提供した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、生業体系研究と自然資源利用研究、環境史研究を架橋するものである。本論文では、ベトナム・メコンデルタの塩水侵入地域で展開する「稲・エビシステム (Rice Shrimp System, RSS)」に着目し、自然環境条件と社会経済条件を包括的に分析することを通じて、地域社会の創意工夫と国家やグローバルな制度との関係や、情報交換における従来の対面型ネットワークと新たなソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) との新しい関係を明らかにした。

本論文の学術的価値は以下の3点に要約できる。

第一に、ベトナム・メコンデルタ、特にキエンザン省アンビーン県において展開されているRSSの構築過程を明らかにしたことである。RSSは、塩水侵入という環境リスクにさらされた地域に特有の生業体系であるが、単に水稻とエビの養殖の組み合わせではなかった。年間の塩水遡上と降水分布のサイクルを利用する、自然環境を最大限、利用した生業体系の構築であった。国家によって進められてきたインフラ整備を小農はむしろ破壊し、自然環境の変動と資源を利用する、新しいタイプの生業体系を構築した。そして、そのことは、化学肥料や農薬の使用を減らした環境負荷の少ない生業体系であるばかりか、同時に、有機製品の生産にもつながるため、より高価格での取引を可能とした。小農によるRSS形成のプロセスは、環境リスクへの従属的な適応過程ではなく、また、人為的な管理を強化した集約的な栽培・飼育への移行でもない、新しいタイプの生業体系の構築であった。本研究によって、水稻栽培とエビ養殖を組み合わせた類似の生業体系との本質的な差異を明らかにした。

第二に、生業体系研究や自然資源利用研究に対する貢献である。既存研究の多くが、自然環境の分析に社会経済的要因を組み込むことを課題としていたのに対し、本研究では、長期の現地滞在により、小農の技術に着目することで、両者を架橋するきっかけを見出した。小農の技術は、自然環境を利用するためだけに採用されるのではなく、世帯ごとの社会経済的条件の差異をふまえた生計戦略を如実に反映して選択的に採用されていた。自然環境条件と社会経済条件を包括的に理解するための重要な分析枠組みを提供した。

第三に、環境史研究に対する貢献である。従来、ベトナム・メコンデルタの環境史研究では、洪水対策の歴史が中心であった。本論文では、洪水対策を含めたメコンデルタ開発史の中に、塩水侵入地帯の歴史を新たに位置づけた。また、より一般的な環境史研究に対しては、過去のインフラの蓄積によって改変された自然環境条件が、小農の創意工夫によって能動的に利用されていることを明らかにした点が重要であった。

本研究は、現地語を利用したインタビュー調査や質問票調査の実施、自然科学的要因と社会科学的要因の総合的な分析、地域社会の小農の視点と国家政策やグローバルな言

説との接合など、方法論的にも研究の視点としても、総合的な地域研究にふさわしい成果であるといえる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2026年2月6日に論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。